



## ヒガンバナは、なぜそうよぶの

### 秋のひがん(9月)のころ咲くから

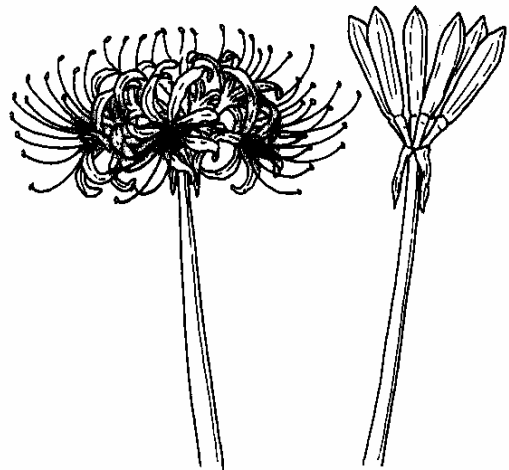
ヒガンバナは、漢字では「彼岸花」と書きます。ちょうど、秋のおひがんのころ、墓参りにいくと、お墓の近くなどに、真っ赤な大きな花だけが、地面から、くきがつき出たように咲いています。花が咲いているときには、まだ、葉はありません。そのため、とても目立ち、ヒガンバナとよばれるようになったようです。

### ヒガンバナには毒がある

ヒガンバナは、花が咲き終わったあとで、スイセンと同じような葉が出てきて、次の年の春には、かれてしまいます。ほってみると、大きなうろこが重なったような球根をもっています。球根には、でんぷんがたくさんふくまれています。リコリン(アルカロイド)という毒をもっているため、そのままでは食べられません。すりつぶして水にさらし、毒をぬけば食料になります。

### 日本には、食用にもちこまれた

日本のヒガンバナは、昔、食料が不足していたころ、中国から球根が、食用にもちこまれたと考えられています。うろこの重なったような球根は、ちぎれたり切られたりすると、もとどおりになる力が強いので、畑の近くなどで、群がって生えていることがあります。(監修・矢野 亮)



ヒガンバナ(右は、つぼみ)

